

伊藤教授「クリニック」ニ於ケル腹水治療

(明治三十四年—大正十三年)

Ueber die Bekämpfung der Bauchwassersucht in der Klinik von Herrn

Professor H. ITO (1891-1924).

Von Dr. W. MAEDA.

[Aus der I. chirurg. Klinik der kais. Universität zu Kyoto, (Prof. Dr. R. Torikata)]

京都帝國大學醫學部外科學教室(烏湯教授)

大學院學生 醫學士 前 田 和 三 郎 述

抑モ腹水ニ對スル外科の治療ノ方針ハ從來共ニ決シテ原因的デハナクシテ本態的療法(Therapia morbi)デアル或ハ單ニ症候的療法(Therapia symptomatica)デアルガ大體ニツニ別ツコトガ出來ル。

第一ハ門脈系統靜脈血ノ鬱滯ヲ副行循環ニヨツテ防止セントスルモノ、第二ハ腹水ノ持續的直接排液法。第三ハ第一ノ方針ニ兼ネテ更ニ腎臟ノ機能ヲ旺盛ニシテ排尿ヲ促サントスルモノ即チ腹水ノ本態的療法ト間接排泄法トヲ合併シタルモノトデアル。

第一ノ方針ハドラモン氏(Drumsmond)⁽¹⁾及タルマ氏(Talma)⁽²⁾ニヨツテ大綱ヲ腹壁腹膜ニ固定スルコトヲ以テ試ミラレタ。伊藤教授及尾見博士⁽³⁾ハ此問題ニ關シテ注意深キ動物實驗ヲ行ツテ居ラレル。即チ最初ヨリ一次的ニ門脈幹ヲ結紮シタ動物ハ直チニ失血症狀ヲ起シテ斃レルガ、門脈ノ分枝ヲ末梢ヨリ次第ニ結紮シテ遂ニ門脈幹ニ及ブ時ハ生存シ得ルコト。又先キニ大綱ヲ腹壁腹膜ニ固定シテオケバ門脈幹ヲ一次的ニ結紮シテモ必ズシモ斃レルモノデハナイ。之ハ實際腹部諸臟器ノ間及腹部諸臟器ト腹壁トノ間ニ生ズル廣キ癒着ト、ソノ爲メニ生ズル常在性吻合血管ノ擴張及門脈副血行

ノ發達ニ依ルモノデアルト云ツテ居ラレル。

此ノ動物實驗及臨床例ノ觀察ニ基イテ腹水ノ外科的處置トシテハ出來ル限リ腹部諸臟器ノ間及腹部諸臟器ト腹壁トノ間ニ廣キ癒着ヲ造ラント努力スベキデアル。大網固定ノ如キハ單ニ其一部タルニ過ギナイ。而シテ大網ヲ腹膜内面ニ固定スルモ腹膜外面ニ固定スルモ何等差違ナキコトヲ立證セラレ、此目的ニ向ツテハ長キ滅菌「ガーゼ」ヲ輕ク一時的ニ腹腔内ニ挿入シテ二十四時間以内ニ除去スル方法ヲ推奨シテ居ラレル。コレハ要スルニ腹腔荒蕪法ト稱シテモ宜シキモノカト考ヘラレル。

尾見博士⁽⁴⁾ハ更ニ進ンデ動物實驗ニヨリ腹壁腹膜ニ滅菌「ガーゼ」ヲ縫合シテオケバ腹部諸臟器及腹壁トノ間ニ廣キ癒着ヲ營マシメ得ルコト、腎臟ヲ大網又ハ腸間膜ニ縫合シテオケバ門脈幹ヲ一次的ニ結紮スルモ必ズシモ動物ハ斃死セザルコト及ビ此場合腎血管ト門脈系統血管トノ間ニ吻合ヲ生ジテ居ルコト、特ニ大網ヲ腎臟切開創ニ挿入シタ場合ニ最モ著シイコトヲ證明シテ居ラレル。

又彼ノ門脈幹ト下大靜脈トヲ吻合セシメルエツク氏瘻孔造設術式ニ就イテハ矢吹博士⁽⁵⁾ノ詳細ナル動物實驗ガアル、同氏ハ門脈幹ト下大靜脈トノ間ノ吻合術式ヲ種々比較研究シ、兩血管ノ側壁ヲ同時ニ鉗子ヲ以テ壓迫シ側々吻合ヲ行ヲ以テ最良法ダトセラレ、又更ニ人屍體ニ於テ門脈幹及附近臟器ノ外科學的解剖⁽⁶⁾ヲ檢索シテ兩血管ヘノ手術的到達路トシテ兩血管ノ右外側ヨリ入ルモノヲ最優良ダト推奨シテ居ラレル。

第二ノ腹水ノ持續的排液法トシテハ或ハ直接ニ外界ニ排泄シ、或ハ先ヅ皮下組織内ニ送り、然ル後血管内ニ送り、或ハ直接血管内ニ送ル等ノ方法ガアル。緒方博士⁽⁷⁾ハ種々ノ方法ニヨル腹水ノ持續排液法ヲ研究セラレタ。即チ硝子鉗、護謨「コンドーム」、彎曲銀線、皮膚管、腹孔、筋膜片、氣管、食道及血管、絹絲、丁字形銀管、大網ノ皮下固定、其他腹水ヲ直接ニ血管内ニ導ク方法等ニ依リ腹水ノ持續排液法ヲ試ミラレタ。

臨床例ニ於ケル剖檢所見及ビ動物實驗ニヨリ、腹腔内ニ突出セル異物ハ其何タルヲ問ハズ周圍ノ腹膜細胞増殖ニヨリ

生成シタ薄キ膜ヲ以テ全ク被覆セラル、カ、或ハ大綱ノ癒着シテ之ヲ隱蔽スルコトヲ立證シ、腹水ノ持續排液法ナルモノハ總テ一時的ニシテ永久のニ持續セザルコトヲ喝破シテ居ラレル。唯ダ同氏ノ考案ニナル家兎ノ新鮮ナル、或ハ「フォルマリン」液中ニ硬化保存セラレタル氣管ニテ排液管ヲ形成シタ場合ハ其成績ヤ、良好デアルコトヲ述ベテ居ラレル。尙ホ副島博士⁽⁸⁾ハ腹水ヲ直接血管内ニ誘導スルツト氏 (Routte) 術式⁽⁹⁾ヲ行ヘル患者三例中一例ニ於テ稍々効果ヲ認メタル事ヲ報告シテ、同法ハ必ズシモ推奨スベキモノデナイト云ツテ居ラレル。

第三ノ腎臟ノ機能ヲ高メテ排尿ヲ促シ以テ間接ニ腹水ヲ持續的ニ排出セシメントスル方法ニ就イテハ鳥瀉教授⁽¹⁰⁾ハ先キニ僅カニ一頭ノ犬ニ就テノ實驗結果デハアルガ尾見博士⁽¹¹⁾ニヨリ證明セラレタル大綱ノ腹腔内ニ於ケル腎臟内挿入ニヨル門脈系統血管ト腎血管トノ吻合形成及ビ更ニ磯部博士⁽¹²⁾ニヨリ詳細ニ實驗セラレタル大綱ノ腎臟内挿入ハ大綱ト腎血管ノ間ニ明カニ動脈性副血行ヲ生ジ慢性間質性腎炎ニ對シテ効果アルベシトノ說ニ基イテ臨床上始メテ之ヲ人體ニ試ミ肝硬變・肝臟微毒又ハ腎炎ニヨリ尿量ノ少キ患者六名ニツキ腹腔外腎臟内大綱挿入法ヲ行ツテ五例ニ於テ著シキ尿量ノ増加ヲ認メ、腹水患者ニ對シテモ亦同法ノ推奨スルニ足ルコトヲ舉ゲテ居ラレル。以上ハ伊藤教授及教室諸先輩ノ爲サレタ業績ノ極ク大要ニ過ギナイ。

サテ次ニ明治卅四年ヨリ大正十三年マデ伊藤外科「クリニツク」ニ於テ肝硬變又ハ肝臟微毒等ニヨル腹水ニ對シ外科的處置ヲ加ヘタル三十九例ニ就テ其手術術式、術後ノ狀況及ビ治療成績ノ一般ヲ述ベタイ。

例二第	例一第	數例
田中某	柴田某	姓名
女	男	別性
オ一十五	オ三十五	齡年
肝硬變	肝微毒性 硬變	臨 床 診 斷
約九ヶ月前 ヨリ腹部膨 滿セリ	約四ヶ月 ヨリ腹部膨 滿セリ	主 訴
手術(明治卅四年九月廿一日)(肝硬 變)大綱及腹壁腹膜ヲ摩擦シ固定ス タルマ氏法。	手術(明治卅四年三月廿九日)大綱及 腹壁腹膜ヲ摩擦シテ固定ス、タルマ 氏法。	手術術式及手術時所見
不 明	不 明	尿 量
不 明	不 明	術 後
術後四日目死亡	術後四日目死亡	術後狀況
剖檢セズ	肝硬變 大綱ハ一部腹壁腹 膜ト癒着セリ	剖 檢 所 見
不 明	不明	治 療 成績

例十第	例九第	例八第	例七第	例六第	例五第	例四第	例三第
木野某	河合某	北川某	大橋某	溝口某	北折某	崎野某	芝原某
男	男	女	男	男	男	女	女
才八十四	才二十四	才八卅	才二十四	才六廿	才八十	才四十六	才一廿
肝硬變 約四ヶ月前 満セリ	肝硬變 約五ヶ月前 満セリ	肝硬變 約三年前ヨ 腹部膨満 セリ	肝硬變 約二年前ヨ 腹部膨満 セリ	肝硬變 約一ヶ月前 満セリ	肝硬變 約二ヶ月前 満セリ	分葉肝 約九ヶ月前 満セリ	肝硬變 約六ヶ月前 満セリ
手術(明治廿八年十一月廿七日) 大網ヲ皮下ニ固定ス、ナラト氏法	手術(明治廿八年九月一日)(肝硬變) 大網及腹壁腹膜ヲ摩擦シ固定ス、タルマ氏法。	第一回手術(明治廿八年五月廿四日) 大網及腹壁腹膜ヲ摩擦シ固定ス、タルマ氏法。 第二回手術(一ヶ月半後)腸管ノ間及腹壁ノ間ニ減菌「ガーゼ」ヲ挿入シ翌日之ヲ除クニ瘻孔ヲ造リ腹水多ク漏出ス、伊藤、尾見氏法。	手術(明治廿七年七月七日) 大網及腹壁腹膜ヲ摩擦シ固定ス、タルマ氏法。	手術(明治廿七年七月七日)大網及腹壁腹膜ヲ摩擦シ固定ス、タルマ氏法	手術(明治三十五年十二月十五日) 大網及腹壁腹膜ヲ摩擦シ固定ス、タルマ氏法。	手術(明治卅五年六月十二日)(分葉肝)大網及腹壁腹膜ヲ摩擦シ固定スタルマ氏法。	手術(明治卅四年十二月廿五日)(肝臟周圍炎)大網及腹壁腹膜ヲ摩擦シ固定ス、タルマ氏法。
二五〇—一五〇 〇珽	不 明	七〇〇—一〇〇 珽	不 明	四〇〇—一〇〇 〇珽	二〇〇—一五〇 〇珽	一〇〇—一四〇 〇珽	不 明
二五〇—一五〇 〇珽	不 明	第一回手術後 二〇〇—一五〇 珽	四〇〇—一〇〇 〇珽 加シテ一〇〇 トナル	不 明	不 明	不 明	一〇〇—一三〇 〇珽
(+)		(+)	(-)				(+)
次第ニ衰弱シ意識 日死亡	術後三日目死亡	第二回手術後三日 目死亡	術後十ヶ月輕快退 院セルモ其後約二 ヶ月シテ再入院シ 尿量ハ次第ニ減ジ 唯穿刺ヲ行フノミ ナリシニ一ヶ年後 死亡セリ	術後三日目死亡	手術翌日死亡	術後四日目死亡	術後三ヶ月半退院 入院當時ニ大差ナ シ
剖檢セズ	剖檢セズ	剖檢セズ	剖檢セズ	剖檢セズ	肝硬變 大網ハ人工的ニ腹 壁腹膜ニ縫合セラ ル	剖檢セズ	
不良	不明	不良	良	不明	不明	不明	不良

例 一 十 第	例 二 十 第	例 三 十 第	例 四 十 第
加藤某	河野瀨	廣田某	上岡某
女	男	男	男
才 五 十 二	才 三 十 四	才 八 十 二	才 八 十 卅
肝硬變 ヨリ腹部膨 滿セリ	肝硬變 ヨリ腹部膨 滿セリ	肝硬變 ヨリ腹部膨 滿セリ	肝硬變 ヨリ腹部膨 滿セリ
約四ヶ月前 第二回手術(約半年後)腹腔内ニ「ガ ーゼ」ヲ挿入シ翌日之ヲ除ク、伊藤 尾見氏法。	約三ヶ月前 手術(明治卅九年八月廿一日) 大網ヲ皮下ニ固定ス、ナフト氏法	約九ヶ月前 第一回手術(明治卅九年十月二日) (肝臓下面ニ雞卵大腫瘍アリ)大網ヲ 皮下ニ固定ス、ナフト氏法。 第二回手術(廿九日後)右側腎臓被膜 剝離フオーカス氏法。	約七ヶ月前 第一回手術(明治卅九年八月卅一日) (肝硬變)大網ヲ皮下ニ固定ス、ナラ イト氏法。 第二回手術(四十日後)右側腎臓被膜剝 離、フオーカス氏法。 第三回手術(四十三日後)左側腎臓被膜 剝離、フオーカス氏法。 第四回手術(二十五日後)丁字形銀管 ニヨル持續排液法、ベリノフ氏法。 第五回手術(約一年後)左側大サフエ ナ靜脈 腹腔トノ吻合、ルット氏法。 第六回手術(九日後)右側大サフエナ 靜脈ト腹腔トノ吻合、ルット氏法。 第七回手術(約一年三ヶ月後)癰疽ニ ツ、マレタル銀管除去。
一〇〇〇—三〇 〇〇〇—一四〇	一〇〇〇—一四〇 〇〇〇—一四〇	一〇〇〇—一四〇 〇〇〇—一四〇	一〇〇〇—一四〇 〇〇〇—一四〇
第一回手術後 第二回手術後 第三回手術後 第四回手術後 第五回手術後 第六回手術後 第七回手術後	第一回手術後 第二回手術後 第三回手術後 第四回手術後 第五回手術後 第六回手術後 第七回手術後	第一回手術後 第二回手術後 第三回手術後 第四回手術後 第五回手術後 第六回手術後 第七回手術後	第一回手術後 第二回手術後 第三回手術後 第四回手術後 第五回手術後 第六回手術後 第七回手術後
(+)	(+)	(+)	(+)
第二回手術後三日 目死亡	術後四日目死亡	術後卅日輕快退院	第六回手術後尿量 次第ニ増シ一二〇 〇—二〇〇〇脱ト ナリ穿刺ヲ要セザ ルニ至リ四ヶ月後 輕快退院
剖檢セズ	剖檢セズ	剖檢セズ	剖檢セズ
不良	不良	不良	不良

例 廿 第	例九十第	例八十第	例七十第	例 六 十 第	例 五 十 第
成島某	青木某	葉崎某	某野々口	西村某	藤田某
男	男	男	男	男	女
才 五 十 五	才四卅	才四廿	才八卅	才 一 十 五	才 二 十 四
腹水	肝硬變	肝硬變	肝硬變	肝硬變	肝硬變
約三年前 ニ腹膨滿セリ	約二ヶ月前 ヨリ腹膨滿セリ	約二ヶ月前 ヨリ腹膨滿セリ	約三ヶ月前 ヨリ腹膨滿セリ	約十日前 腹膨滿セリ ルニ氣附ク	約一ヶ月前 ヨリ腹膨滿セリ
第一回手術(明治四十二年六月廿二日)(肝硬變)大網ヲ皮下ニ固定ス、ナラト氏法。	手術(明治四十二年一月十九日)(肝硬變)大網ヲ皮下ニ固定ス、ナラト氏法。	手術(明治四十一年十二月三日)大網ヲ腹膜外面ニ固定ス、タルマ氏法。	手術(明治四十一年八月廿八日)(肝硬變)大網ヲ腹膜外面ニ固定ス、タルマ氏法。	第一回手術(明治四十一年五月十七日)(肝硬變)右側大サフエナ靜脈ト腹腔トノ吻合、ルツト氏法。	第一回手術(明治四十年十月九日)大網ヲ腹壁腹膜ニ固定シ一部ハ皮下ニモ固定ス、タルマ氏法。
第二回手術(十六日後)右側大サフエナ靜脈ト腹腔ト吻合、ルツト氏法。				第二回手術(五日後)左側大サフエナ靜脈ト腹腔トノ吻合、ルツト氏法。	第二回手術(四十四日後)右側腎被膜剝離フオーカス氏法。
第三回手術(廿一日後)大網ヲ腹膜外面ニ固定ス、タルマ氏法。				第三回手術(廿一日後)大網ヲ腹膜外面ニ固定ス、タルマ氏法。	
二〇〇—一六〇	一五〇—一三〇	二〇〇—一四〇	不 明	二〇〇—一三〇	二〇〇—一四五
第一回手術後 一五〇—一七〇	第一回手術後 一五〇—一六〇	不 明	不 明	第一回手術後 二〇〇—一五〇	第一回手術後 二〇〇—一三五
第二回手術後 一〇〇—一六〇	第二回手術後 一〇〇—一六〇	不 明	不 明	第二回手術後 一〇〇—一三五	第二回手術後 一〇〇—一四五
(+)	(+)	(+)		(+)	(+)
第二回手術後十日 尿量ハ次第ニ減少シ 衰弱シ意識濁シテ死亡	術後六日意識濁 濁シテ死亡	術後三日目死亡	術後三日目死亡	第三回手術後十六日 意識濁濁シテ死亡	第二回手術後尿量 ハ次第ニ増加シ五 トナリ輕快退院 (二ヶ月後)
肝硬變 固定セラレタル大 網ハヨク癒着セル モ擴張セル靜脈認 メ難シ、大サフエ ナ靜脈ノ内腔ハ小 ナルモ閉孔セリ	剖檢セズ	剖檢セズ	剖檢セズ	肝硬變 大サフエナ靜脈左 側ハ閉鎖セルモ右 側ハ閉鎖セリ癒着シ 大網ハ堅ク癒着シ 血管新生セリ	
不 良	不 明	不 明	不 明	不 良	良

例五廿第	例四廿第	例三廿第	例二廿第	例一廿第
三上某	家原某	某長谷川	中奥某	千原某
男	男	男	男	男
才九廿	才五十四	才六卅	才五廿	才九廿
腹水	脾腹水腫	肝硬變	肝硬變	肝硬變
約一ヶ月前 より腹部膨 滿セリ	約三ヶ月前 より腹部膨 滿セリ	約三ヶ月前 より腹部膨 滿セリ	約十ヶ月前 より腹部膨 滿セリ	約五ヶ月前 より腹部膨 滿セリ
第一回手術(明治四十三年十一月一日)大網ヲ腹膜外面ニ固定ス、タルマ氏法。 第二回手術(十二日後)左側腎臟被膜剝離、フオーカス氏法。 第三回手術(十一日後)右側腎臟被膜剝離、フオーカス氏法。 第四回手術(廿九日後)左側大サフエナ靜脈ト腹腔トノ吻合、ルツト氏法。 第五回手術(卅五日後)右側大サフエナ靜脈ト腹腔トノ吻合、ルツト氏法。 第六回手術(七十六日後)脾臟固定ノ目的ニテ開腹セルモ脾臟甚少ナリシ爲メ大網ノ一部ヲ腹膜内面ニ固定スタルマ氏法。	手術(明治四十三年八月八日)(脾腫肝硬變セズ)大網ヲ皮下ニ固定ス、ナラート氏法、 第一回手術(明治四十三年十一月一日)大網ヲ腹膜外面ニ固定ス、タルマ氏法。 第二回手術(十二日後)左側腎臟被膜剝離、フオーカス氏法。 第三回手術(十一日後)右側腎臟被膜剝離、フオーカス氏法。 第四回手術(廿九日後)左側大サフエナ靜脈ト腹腔トノ吻合、ルツト氏法。 第五回手術(卅五日後)右側大サフエナ靜脈ト腹腔トノ吻合、ルツト氏法。 第六回手術(七十六日後)脾臟固定ノ目的ニテ開腹セルモ脾臟甚少ナリシ爲メ大網ノ一部ヲ腹膜内面ニ固定スタルマ氏法。	手術(明治四十三年五月廿二日)左側腹腔外腎臟内大網挿入法、烏湯氏法 手術(明治四十三年八月八日)(脾腫肝硬變セズ)大網ヲ皮下ニ固定ス、ナラート氏法、	手術(明治四十二年八月四日)試験的開腹ト右側大サフエナ靜脈ト腹腔トノ吻合、ルツト氏法。	手術(明治四十二年八月二日)(肝硬變)大網ヲ腹膜外面ニ固定ス、タルマ氏法。
一五〇珩	二〇〇—四〇珩	二〇〇—七〇珩	不 明	五〇〇珩
第一回手術後 二〇〇—六〇珩 第二回手術後 二〇〇—六〇珩 第三回手術後 三〇〇—五〇珩 第四回手術後 三〇〇—五〇珩 第五回手術後 二〇〇—五〇珩 第六回手術後 二〇〇—五〇珩	第一回手術後 二〇〇—六〇珩 第二回手術後 二〇〇—六〇珩 第三回手術後 三〇〇—五〇珩 第四回手術後 三〇〇—五〇珩 第五回手術後 二〇〇—五〇珩 第六回手術後 二〇〇—五〇珩	不 明	不 明	不 明
(+) (+) (+) (+) (+) (+)	(+)			
各手術後尿量増加セリ 第七回手術後尿量増加セリ 第七回手術後尿量増加セリ	尿量稍々増加セルモ腹部入院當時ニモ差ナク十日目退院	術直後死亡	術後五日目死亡	術後三日目死亡
分葉肝 大網ハ腹膜ト堅ク癒着シ血管新生セリ 大サフエナ靜脈腹腔吻合部ハ癒痕トナル 左腎ニハ大網ノ一部挿入縫合セララル		剖檢セズ	剖檢セズ	剖檢セズ
不良	不明	不明	不明	不明

例一廿第	例廿第	例九廿第	例八廿第	例七廿第	例六廿第	
某長谷川	牛尾某	前川某	永山某	宮内某	野村某	
女	男	女	男	男	男	
才六廿	才十四	才八廿	才十五	才八十四	才三十四	
腹水	肝硬變	肝硬變	肝硬變	肝硬變	肝硬變	
部膨滿セリ	約六ヶ月前 滿セリ	約十ヶ月前 滿セリ	約三ヶ月前 滿セリ	約四ヶ月前 滿セリ	約一ヶ月前 滿セリ	
第一回手術 大正元年八月廿六日(大網ハ前腹壁ニ堅ク癒着シ靜脈擴張セリ試験の開腹ニ止ム)	手術(明治四十五年一月十三日)硝子製鈕釦ニ挿入ニヨル持續排液法、ペーターソン氏法。	第一回手術 明治四十四年六月廿七日(肝硬變)絹絲ニヨル持續排液法ラムボット氏法。 第二回手術(二十七日後)脾臓固定ノ目的ヲ以テ開腹セシモ脾臓ハ前腹壁ト堅ク癒着セルヲ以テ試験の開腹ニ終ル	手術(明治四十四年五月二日)肝硬變)左側腹腔外腎臓内大網挿入法、鳥湯氏法。	手術(明治四十四年四月廿五日)左側腹腔外腎臓内大網挿入法、鳥湯氏法。	手術(明治四十四年一月十七日)(肝硬變)左側腹腔外腎臓内大網挿入法、鳥湯氏法。	第七回手術(廿七日後)左側腹腔外腎臓内大網挿入法、鳥湯氏法。
〇三〇〇一五〇	〇三〇〇一四〇	不 明	〇三〇〇一六〇	〇三〇〇一五〇	〇四〇〇一五〇	
第一回手術後 〇三〇〇一七〇	第一回手術後 〇一〇〇一三〇	第一回手術後 〇二〇〇一五〇	不 明	〇二〇〇一八〇	不 明	
(+) (+)		(+) (+)				
術後尿量増加セズ 第二回手術後八日退院	術後十日目死亡	尿量増加セズ第二回手術後十七日退院、退院後約五ヶ月死亡	術直後死亡	術後十日目死亡	手術翌日死亡	
肝硬變 硝子鈕釦ハ腹腔ヨリ見ルニ薄キ被膜ヲ以テ被ハル			剖檢セズ	剖檢セズ	肝硬變 大網ノ一部左腎挿入縫合セラル	
不 良	不 良	不 良	不 明	不 明	不 明	

例七 卅 第	例六 卅 第	例五 卅 第	例四 卅 第	例三 卅 第	例二 卅 第
稻田某	中村某	入江某	澁谷某	吉田某	石田某
男	男	男	男	女	男
才 二 十 五	才 十 六	才 八 廿	才 九 十	才 八 卅	才 七 卅
肝硬變	腹 水	腹 水	腹 水	腹 水	腹 水
約二ヶ月 前 満セリ	約二ヶ月 前 満セリ	約二年半 前 満セリ	五ヶ月 前 満セリ	約一ヶ月 前 満セリ	約八ヶ月 前 満セリ
手術(大正四年十一月十一日)家兎氣管挿入ニヨル持續排液法、緒方氏法	手術(大正三年十二月廿七日)(肝硬變)硝子鈕挿入ニヨル持續排液法、ベーターソン氏法。	手術(大正二年七月十四日)硝子製鈕挿入ニヨル持續排液法、ベーターソン氏法。	手術(大正二年二月十八日)腎臟切開術ヲ行ヒ割面ヲ輕ク摩擦ス	手術(大正二年十一月廿六日)硝子製鈕挿入ニヨル持續排液法、ベークソン氏法。	第一回手術(大正元年九月廿一日)硝子製鈕挿入ニヨル持續排液法、ベーターソン氏法。 第二回手術(十五日後)大綱ヲ皮下ニ固定ス、ナラート氏法。
二〇〇、三〇〇、二〇〇、一五〇	二〇〇—一五〇—四〇〇—一八〇	六五〇、六〇〇、一四〇	三〇〇—一六〇—四〇〇—一〇〇	二〇〇—一四〇—二〇〇—一五〇	第一回手術後 三〇〇—一五〇 第二回手術後 三〇〇—一五〇
(+)	(+)	(-)	(+)	(+)	(+)(+)
次第一ニ衰弱シテ術後約一ヶ月ニシテ死亡	次第二ニ衰弱シテ術後廿二日目死	尿量次第二ニ増加シテ十九日目輕快退院セリ	術後一時尿量増加セシモ再ヒ減ジ卅七日目死亡	術後七十七日次第ニ衰弱シテ死亡	第二回手術後二十日退院入院當時ニ大差ナシ
肝硬變、挿入セル氣管ハ腹腔側ヨリ見ルニ孔ハ全ク閉鎖セラレ、平滑ナル被膜ニテ被ハル	肝臟ハ一部肥大シ一部ハ萎縮シ痛性浸潤ヲモ認ム、硝子鈕挿入ハ腹腔内ニ突出セルモ皮下ノ部ハ胡桃大血腫ニヨリ被ハル	肝臟ハ一部肥大シ一部ハ萎縮シ痛性浸潤ヲモ認ム、硝子鈕挿入ハ腹腔内ニ突出セルモ皮下ノ部ハ胡桃大血腫ニヨリ被ハル	門脈系ノ諸所ニ於テ血管壁肥厚シ血栓アリ開部ニ相當シテ癒痕アリ	分葉肝、硝子製鈕ハ薄キ被膜ニテ被ハル	
不良	不良	良	不良	不良	不良

例九 卅 第	例八 卅 第
白井某	田村某
男	女
才 二 十 五	才 十 四
腹	腹
水	水
約一ヶ月 前 ヨリ 腹 部 膨 満 セリ	約五ヶ月 前 ヨリ 腹 部 膨 満 セリ
第一回手術(大正五年三月十四日) (肝硬變)家兎ノ氣管挿入ニヨル持續 排液法、緒方氏法。 第二回手術(四十五日後)大綱ヲ皮下 ニ固定ス、ナラート氏法。	手術(大正五年二月七日)(肝硬變) 大綱ヲ皮下ニ固定ス、ナラート氏法
不	不
明	明
第一回手術後 三〇〇―一五〇 〇耗 第二回手術後 二〇〇―一五〇 〇耗	第二回手術後 二〇〇―一五〇 〇耗
(+) (+)	(+)
腹部膨滿ノ度減ジ 尿量ハ次第ニ増加 シテ一〇〇―二 〇〇耗トナリ第 二回手術後約三ヶ 月退院	次第ニ衰弱シテ術 後四十九日ニシテ 死亡 剖檢セズ
頁	不頁

伊藤外科「クリニック」ニ於テ腹水患者ニ行ツタ手術術式トシテハ十二種ヲ舉ゲルコトガ出來ル。

- 一、タルマ氏法 (Talma) ⁽¹⁾ 臍ノ上方正中線ニテ開腹シ大網ヲ腹膜内面又ハ腹膜外面ニ固定スルモノ。 . . . 十七回
- 二、ナラート氏法 (Narath) ⁽¹²⁾ 臍ノ上方正中線ニテ開腹シ牽出シタル大網ヲ皮下ニ固定スルモノ。 . . . 十回
- 三、ルット氏法 (Routte) ⁽⁹⁾ 大サフエナ靜脈ヲ切斷シ其中心端ヲ翻轉シテ腹腔ニ吻合セシムルモノ。 . . . 八回
- 四、フオーカス氏法 (Phocas) ⁽¹³⁾ 腎臓ノ纖維性被膜ヲ剝離スルモノ。 . . . 六回
- 五、烏瀾氏法 ⁽¹⁰⁾ 腰部ヨリ腹腔外ニ於テ腎臓ニ達シツォンデック氏ニ從ヒ腎臓ヲ切開シ結腸間膜ノ上方ヨリ牽出シタル大網ヲ其切開創内ニ挿入シテ縫合スルモノ。 . . . 五回
- 六、ペーターソン氏法 (Peterson) ⁽¹⁴⁾ 臍下正中線ニ皮膚ヲ切開シ腹直筋外縁ニ於テ特殊ノ形態ヲナセル硝子製鈕釦ヲ挿入シテ腹腔ト皮下ニ交通ヲ形成スルモノ。 . . . 五回
- 七、緒方氏法 ⁽¹⁾ 新鮮ナル又ハ「フオルマリン」ニ浸漬シテ硬化保字セル家兔氣管ヲ以テ前同様腹腔ト皮下トノ交通ヲ營マシムルモノ。 . . . 二回
- 八、伊藤、尾見氏法 ⁽³⁾ 腹腔内ニ長キ滅菌「ガーゼ」ヲ挿入シ廿四時間以内ニ之ヲ除キテ腹部諸臓器間及腹部諸臓器ト腹壁トノ間ニ廣キ癒着ヲ營セシメントスルモノ。 . . . 二回

九、 فرانケ氏法 (Frank) (15) 彎曲セル銀線片ヲ以テ腹腔ト皮下トノ通路ヲ形成スルモノ . . . 一回

一〇、ラムボット氏法 (Lambotte) (16) 數本ノ絹絲ヲ其一端ヲ腹腔内ニ出シ他端ハ腹壁ノ皮下ヲ通ジテ上腿ノ皮下ニ達セシ

メ人工的ニ淋巴管形成術ヲ行フモノ . . . 一回

一一、ペリノフ氏法 (Perinoff) (17) 丁字形銀管ノ垂直脚ヲ腹腔内ニ入レ水平脚ヲ皮下ニ固定スルモノ . . . 一回

一二、單ニ腎臟切開術ヲ行フモノ . . . 一回

前表ニ於テ見ラル、如ク同一患者ニ於テ種々ノ術式ヲ重複シテ行ツテアルカラ、各術式ニ就イテ其手術的效果ヲ論ズルコトガ出來ヌノデ、種々ノ術式ヲ一纏ニシテ考ヘ、最後ニ治療成績ニ就テ一言シタイト思フ。

治療成績即チ腹水ニ對スル手術的療法ノ効果ヲ論ズルニ當ツテ何ヲ標準トシテ批判スベキデアルカ之レ甚ダ困難ノ問題デアル。腹圍ノ測計ノ如キハ價值少キモノカト思フ。余等ハ手術前後ニ於ケル尿量ヲ比較スルコトヲ以テ稍々信ズルニ足ル標準カト考ヘタ。此方針ニ從ツテ余ハ治療成績ヲ良、不良、不明ノ三ツニ別ツタ。即チ術後尿量術前ニ比シ次第ニ増加シ術後腹水穿刺ヲ要セザルニ至リシモノヲ良トシ、術後モ尿量ニ大差ナク尋常量ニ比シテ少ク、術後モ尙腹水穿刺ヲ要シ、入院當時ト大差ナキ狀態ニテ中途退院セシ者、又ハ次第ニ衰弱シ意識溷濁シテ遂ニ鬼籍ニ入ツタルモノハ不良トシタ。而シテ術後一週間前後ニ死亡セシモノ、如キハ治療成績ヲ論ジ得ラレヌカラ不明トシタ。

前掲卅九例中治療成績不明ノモノ十七例ヲ除キ、残り廿二例中治療成績良ニ屬スルモノハ僅カニ六例ニ過ギヌ。然カモ第七例ノ如クタルマ氏手術後尿量尋常量トナリ穿刺ヲ要セザルニ至リ術後約十ヶ月ニシテ輕快退院セルニ、退院後二ヶ月更ニ入院セシメテ觀察セシニ尿量ハ其後次第ニ減少シ、穿刺ヲ要スル様ニナリ、何等手術的處置ヲ行ハザリシニ、約一ケ年ヲ經過シテ衰弱死亡シタ。

治療成績不良ノモノハ前者ニ比シ十六例ノ多キヲ算スルノデアアル。本療法ハ元々本態的療法カ又ハ對症的療法デ決シテ原因的療法 (Therapia causalis) デナイカラ多クヲ期待シ得ナイノハ明カコトデアアルガ、手術的療法ノ効果少キヲ憾マ

ザルヲ得ナイ。殊ニ剖檢時所見ニヨルニ持續排泄法ニヨル腹腔ト皮下トノ通路ハ、間モナク腹腔内面ニ於テハ薄キ被膜ニヨツテ被ハレ、或ハ管腔ハ癰痕ニヨツテ閉デラル、ノデアアル。

少クトモ本態的療法ヲ主トシテ一層深く研究シ出來ルナラバ更ニ原因的療法ヲ考究スベキデアロウ。

恩師伊藤教授ガ多年ノ臨床的材料ヲ比較研究スルコトヲ許諾セラレタルニ對シ謹テ敬謝ノ意ヲ表シマス。且ツ本學部外科學教室諸先輩努力ノ跡ヲ留メタル此ノ小篇ヲ先生還曆ノ祝賀トシテ捧ゲ得ルコトヲ光榮ト存ジマス。

引用文獻

- 1) **Drummond**, A case of ascites due to cluithrosis of the liver cured by operati. n. British med. Journal, 1896, Vol. 2, p. 728.
- 2) **Talma**, Chirurgische Oeffnung neuer Seitenabnahmen für das Blut der Vena porta. Berliner klinische Wochenschrift, 1898, S. 833.
- 3) **Ito & Omi**, Klinische und experimientelle Beiträge zur chirurgischen Behandlung des Ascites. Deutsche Zeitschr. f. Chir., 1901, Bd. 62, S. 141.
- 4) **Omi**, Weitere experimentelle Untersuchungen zur Frage der Talmischen Operation. Beiträge zur klin. Chir., 1907, Bd. 53, S. 446.
- 5) **矢吹**, エツク氏瘻孔造設術式ノ比較研究及之ニ關スル一二事項ニ就テ, 日新醫學, 第十卷, 257 頁.
- 6) **矢吹**, エツク氏瘻孔造設術研究續遺. 瘻ニ門脈幹及附近臟器ノ外科學的解剖. 日本外科學界雜誌, 第廿一回, 第十二號, 633 頁.
- 7) **緒方**, 腹水ニ對スル種々ナル持續排泄法ノ價值ニ就テ. 日新醫學, 第六年, 第四號, 631 頁.
- 8) **Sojesima**, Beitrag zur operativen Behandlung des Ascites bei Lebereirrhose. Deutschh Zeitschr. f. Chir., 1909, Bd. 98, S. 390.
- 9) **Route**, Abouchement de la veine sapliène extreme au peritone pour resorber les épauchements Sciatiques. Lyon médical. 1907, tome 109, p. 574.
- 10) **Torkata**, Extrapitonaele Einleitung des Netzes in die Niere als Therapeutikum, insbesondere als Diuretikum. Deutsche Zeitschr. f. Chir. 1911, Bd. 110, S. 420.
- 11) **Isobe**, Experimentelle Beitrag zur Bildung arteriellen Kollateralthnahmen in der Niera. Mitteilungen aus den Grenzgebieten, 1912, Bd. XXIV, S. 822.
- 12) **Karath**, Ueber die subkutane Verlagerung des Omentum. Zentralbl. f. Chir., 1905, Nr. 32, S. 833.
- 13) **Phocas**, Zitiert bei Sojesima.
- 14) **Paterson**, Treatment of ascites by drainage into the subcutaneous tissues of the abdomen. The Lancet, 1910, Vol. II, p. 1273.
- 15) **Franke**, Über Versuche mit Baueintränge bei Aszites. Verhandlungen der Deutschen Gesellschaft für Chirurgie, 1912, 41, S. 215.
- 16) **Lambotte**, La fistulisation bonyne interne de l'abdomen comme succédané de l'opération de Talma. La semaine médicale, 1905, p. 19.
- 17) **Perinoff**, Zitiert bei Ogata.